

---

# もう二度と...

萌歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もう二度と…

### 【Nコード】

N9553Y

### 【作者名】

萌歌

### 【あらすじ】

外は雨。万事屋も、いつになく静まり返っている。と、そこに真選組が！？そして突きつけられた事実。銀時は…

## プロローグ（前書き）

ちょっとこれだけは書いておかないといけないなあ〜と思って急ピツチで仕上げました。

文脈等、変なところがありましたら感想などにて指摘お願いします！

## プロローグ

夢を、見た。

『銀時、小太郎、晋助、  
。』  
』

まだ松陽先生が生きていた時の、夢。

『はい。』

雲一つない青空

『何でしょうか、先生。』

頭上には雀が飛んでいて

『何？』

風は穏やかに俺達の間を抜けていく

『  
。  
』

そんな、幸せな時間。

『その遊びは、楽しいですか？』

みんな、笑っていた。

『はい。』

ツラも

『まゆみ』

高杉も

『まゆみ』

俺も

☞

☞!

アイツも

『そうですか。』

松陽先生も、笑ってた。

なら、よかったです。』

俺が1番幸せだった時。

もうこんな時間来るわけがない。

皆、変わった。ちまった。

一人は、商売で宇宙を繋ぐと言い

一人は、穏やかに国を変えると言い



プ  
ロ  
ロ  
ー  
グ  
  
e  
n  
d

## プロローグ（後書き）

「アイツ」とは誰なのか!?

ちなみに、辰馬ではございませぬ。

センサー、「アイツ」のキャラ設定イマイチ決めてないアホがこんなところにいまーす。

何だって???

す、すみません……今一生懸命考えてますので……

問答無用！キャラ設定決めてないのに、もう出す馬鹿がいるかってのってなわけで萌歌!!廊下に立ってなさい。

はい、てなわけでオリキャラ出します。よくあるネタなんで皆さん直ぐに分かるかと思われませんが……

とりあえず、よろしくお願ひしますm( ) ( ) m

言葉の禁……〈笑顔〉（前書き）

短篇としてupしていたものを連載としてupし直しました！

内容は変わってません！！

言葉の禁……〈笑顔〉

外は雨。もう何日もこんな日が続いている。太陽がないと自然と気分も晴れない。

当然万事屋もいつもの騒がしさから比べれば、だいぶ静かだった。

しかし、今日の静けさの原因は雨だけではない…と新八、神楽は思っている。

おかしいのだ、あの人の様子が。

いつもはジャンプだ甘味だと言って、ソファーにウダウダ寝っころがっている銀色だが、今日は社長イスに座り、ぼおっと空を眺めていた。心なしか、銀色の周りの空気もピリピリしている。

「銀さん、調子悪いんですが？」

念のため新八が問い掛ける。十中八九違つたろうが。

「ん？ああーそんなことねーよ。

たまには銀さんだつてぼおつとしたいんですー。」

「銀ちゃんがぼおつとしてるとか何アルか？明日は槍が降るアルか？」

「ちよつと神楽ちゃん？何物騒なこと言つてんの？女の子がそんなこと言つちやいけません。つてか俺がぼおつとしてるだけでそれとか酷くない？」

「だつて事実ネ。」

（銀時Side）

……バレてたか。

出来るだけイライラを出さないようにしていたつもりだったが、地味に長い付き合いのこいつらには効かなかつたらしい。

どうにも嫌な予感がする。昔から嫌な予感だけは当たってしまっ。それに、最近自分の周りをつろついている奴らもいる。

「……もうダメか。」

銀時はそう呟くと和室に入ってしまった。

〔銀時Side end〕

銀時が和室に入って数分。玄関のチャイムがなった。依頼人かと思っただが、今日は銀時が用事があるらしいので、内容によっては断ろうと考えつつ、新八は玄関に向かった。

「はい、今出ます。」

ガラッ

何度も壊され、だいぶ建て付けの悪い扉を開けた先にいたのは、真選組のいつもの3人組、近藤、沖田、土方だった。

「やあ、新八君。」

最初に言葉を発したのは近藤。間髪入れず沖田が「旦那居やすかい？」と続けた。

「銀さん、ですか？」

「ああ。」

「依頼ですか？…まあとりあえず上がってください。」

「邪魔するぜ。」

3人を応接間に連れていくと、音が聞こえたのか、銀時が和室から

顔を出していた。

「税金ドロボーさん達が揃いも揃って何の用？言っとくけど、今日は銀さん忙しいんですー。」

「万事屋、お前に聞きたいことがある。」

「…何？」

そういつて怪訝な顔をして出てきた銀時はいつもの和洋折衷の服ではなく、白地に薄紅の桜があしらわれた、一目見ただけで分かる着物に、濃紺の羽織という格好をしていた。銀時の銀髪によく映えている。

それを見た土方は苦虫を噛み潰したような顔を一瞬して、万事屋、と口を開いた。

「…………お前が、白夜又だな？」

沈黙。

恐ろしい程に空気がピンと張り詰めた空間が広がった。銀時は俯いており、表情を伺うことは出来ない。

「……………やっと気づいた？」

数秒後、顔を上げてあっけからんとそう言い放った銀時。その顔は妙にサッパリとしていた。

「旦那……………」

沖田の端正な顔が辛そうに歪む。

「で？どつすんの？俺を捕まえる？」

「ああ。坂田銀時、天人大量虐殺罪でお前を逮捕する！」

「……………フフフッ」

軽く笑った銀時の目は、全く笑っていない。背後には殺気も漂っている。

「何笑ってやがる!」

うつすらと冷や汗をかきながら、土方も負けじと睨み返す。

「いや、あのツラさえ捕まえないお前らが天下の白夜叉様を捕まえられるのかなー?」

刹那、銀色の風が吹き、真選組の3人は床に伏せられていた。

「無理じゃん」

嘲笑した銀時自身は既に入口のところまで移動している。その手にはいつの間にか深紅の鞘に収められた真剣が握られていた。

「…ッ白夜又アアア！」

「…………ッ銀ちゃんは白夜又なんかじゃないアル！銀ちゃんは銀ちゃんネ！」

「そつだ！銀さんをその名前で呼ぶな！」

やっとのことで声を絞り出した2人。あまりの展開に呆然としていたが、土方が吐いた言葉にようやく我に返った。

「…………出てこいよ、いるんだろ？」

2人の言葉に少し頬を緩めると、どこかに向かい声を上げた銀時。そうすると、音も無くドアが開き、あまりにも有名すぎる3人が顔を出した。

「…………ッ桂…………高杉…………！！！」

「…………ッ！！お前は快援隊の…………！！」

喉から手が出るほど捕まえたい相手が目の前にいる。なのに銀時の峰打ちのせいで動けない。そのことは土方や沖田、近藤を酷く苛立たせた。

「いつから気づいておったのだ、銀時。」

「ヅラが分かりやすすぎるんだよ。」

「ヅラじゃない桂だ。それに高杉、何故お前が答える、俺は銀時に聞いておるのだ。」

「うるせエ、ヅラ。」

「ヅラじゃない桂だ。」

「まあまあ落ち着くぜよ。わしらは銀時に会いに来たんじゃ。」

「……悪かった。」

ハツハツハと黒い笑顔で辰馬が笑うと桂がバツが悪そうに謝る。  
…  
しかし、高杉は華麗にスルーし、銀時に向き直った。

「銀時イ、大切な兄弟より幕府の狗の方が優先ってかア？」

「ゴメンね、晋助。捕まってた。早く行きたかったのに。」

「ツツお前用事って……!!」

「そつだよー。この3人と会う約束してたの。」

「信じてたのに……ッ」

「やっぱり鬼はいつまで経っても鬼ってことかよッ！」

浴びせられる罵声。

「見損ないやした。」

侮蔑の眼差し。

その光景は銀時の中である出来事をフラッシュバックさせてゆく。

「……………」

「……………銀時？」

桂が呼びかけても、何の返事もない。そのかわりに聞こえてきたのは最悪の単語。

……鬼

「……………そうだよ、おれは鬼。…鬼はしあわせになんかなったじゃないんだ。」

「……………ぎんちゃん？」

「……ッツ銀時……！」

「何言つてんだテメエ!!」

「銀時!!」

桂、高杉、辰馬が駆け寄る。のろのろと顔を上げた銀時の目は輝きを失い、何も映していない。

「銀時!! お前は鬼などではない!!」

「テメエは俺達の大切な弟だ!!」

「わしらを見てくれとおせ銀時!!」

焦点の定まらない虚ろな目がゆっくりと3人を映す。

「……しんにい、こたにい、たつにい?」

「ああ、そつだ。」

「帰ろう、銀時。」

「松陽先生の元に戻ろうぜい。」

「もうごきちゃんところにいる必要はなか。」

「……うん、帰る。せんせいのところにかえるよ。」

「……おまんら。」

坂本が口を開く。真選組の3人は銀時の変わりように驚きを隠せな  
いでいた。

「銀時に鬼という単語は禁句じゃ。なのにおまんらは……ッ!」

その言葉に付け足すように、高杉が憎々しげに切り出す。

「どうして俺やツラがテメエらに手を出さなかったか教えてやるのか。」

「……銀時が、真選組の奴らは良い友人だ、と言っていたからだ。貴様らが銀時に気に入られていたから、俺達はお前らに手を出さなかった。」

「……………ッ!!」

「なのに、テメエらはいとも簡単にそれを裏切ったんだぜイ？」

銀時がそんなことを思っていたと知った3人。今さらながらしてかしてしまっただことの重大さを痛感した。

「だが、もう容赦はせん。」

「真選組や幕府はもうすぐ俺達直々に潰してやらア」

大物攘夷志士2人は吐き捨てるようにそう言って、先に行った坂本と銀時を追うように出て行った。

しばらく声も出せなかった5人。

正常に働かない脳で分かることは、

あの銀色の笑顔はもう二度と見る事が出来ないということだけ……

言葉の禁……〈笑顔〉（後書き）

スローペースとなくなってしまいましたが、頑張って連載していきます^  
^

つかの間の…… 夢想 (前書き)

やっと更新したくせに短いです……

もはや閑話の勢いww

つかの間の…… 夢想

あの後、とりあえずは一番近い桂の隠れ家に行こうという話になり、向かった4人。

屋敷に着くと、桂の部下達と高杉の間で一悶着起こったが、坂本が黒い笑顔で一蹴し、その場は収まった。

そして桂の私室に入り、現<sup>いま</sup>在に至る。

「ヅラア、お前けっこう広い屋敷使ってるじゃねエか。しかもこんな江戸の真ん中で、よく幕府の狗に嗅ぎ付けられなかったなア？」

高杉が、先程文句を言われたお返しなのか何なのか、桂を挑発した。

「フン。高杉、貴様は”灯台下暗し”という言葉を知らんのか。そ

れに人数が多いからな、このぐらいの広さがないとダメなのだ。」

それに負けじと桂も挑発。幼稚な争いであることは否めない。

「……………、そんぐれエ知ってらァ。」

間が空いてからのこの言葉。  
今回は高杉の負けらしい。

「これから銀時はどうするがだ？萩に戻るかえ？」

不毛な争いをしている2人は放って置いて、坂本が窓際で空を眺めている銀色に問いかける。

「銀時、俺たちへの迷惑などは一切考えるな。」

桂も銀時の方に向き直り、釘を刺す。

「てめエがやりたいと思うことをやればいい。」

高杉もお気に入りの煙管に火を入れながら呟いた。

そう兄達に言われた銀時は、

「まだ……まだ、考える時間ちょうだい。」

と言う。さっきの事がまだ尾を引いている様子で、いつもの銀時のようなだるーとした喋り方ではない。

そんな弟を見た兄達はこっそりとアイコンタクトをとる。そして桂が立ち上がり、襖の向こうに消えた。

「小太郎は？どうしたの？」

「じきに戻<sup>すく</sup>ってくるき」

「そっか。」

安心した様子の銀時。先程高杉から貰った飴を口に入れ、寝っ転がった。

「どつだつその飴、京都の老舗のモンだぜイ？」

「……!!美味し〜い!!」

ようやく笑った。銀時は先の出来事から一ミリも笑っていなかったのだ。

「ありがと、しんすけ」

ふにやり。まさにこの形容詞がピッタリというような笑い方。

（この顔が見たかったんだツツ！）

兄2人がこんなことを思っているとは露知らず、飴を口の中でカランコロンと転がし、味を堪能している。

一方、兄2人は心の中で全力でガッツポーズをしていた。坂本はともかく、あの高杉もだ。

なぜなら、この2人+桂&今は亡き恩師 吉田松陽の4人は、揃いも揃って銀時バカなのである。

ご察しの読者様もいらっしやるとは思いますが、この4人の最大級の癒しは銀時のふにやりと笑う笑顔なのだ。

「持って来たぞ。」

スツと滑らせるように襖を開けて入ってきた桂の手には酒とお猪口。

「おお！美味そうじゃのう！」

「てめエが1番最初に反応してどうすんだよ。これは銀時のために用意した酒だろオが。」

「そうじゃった、そうじゃった。」

アハハーと辰馬が笑う。高杉も微かに口角を上げていて、銀時も相変わらずのふにゃふにゃ笑顔。

前にもこんなことあったな、と桂は思う。そう、あれはまだ戦争の時。つかの間の休息だった。

『銀時、そんなもんどこにあったんじゃ?』

『秘密……って何でテメーがいるんだよッッ!! テメーじゃなく  
て晋助に声かけたんだよ!』

『アハアハアハ、わしも混ぜてほしいきー！』

『てめエがいると俺たちの飲む量が減るんだよ』

『ほがなことないぜよ』

『待て、俺も入れろ!』

あの時は、こんな未来が来るなんて思ってもみなかった。

国を変えられる、護れると、そう思っていた。

…そう思っていたかった。

……う……るう！小太郎！」

「……！！……何だ銀時か。驚かせるな、心臓に悪い。」

桂が思い出からかえってくると、目の前には自分の自室と3人の顔。

余程思い出に浸っていたらしい。心の中で桂は一人笑う。

「驚かせるなじゃねエよ。銀時が呼んでるってのに、反応しねーてめエが悪イんだろうが。」

「すまない、考え事をしていた。」

「考え事だア？考え事なんて酒持ったまんまするモンじゃねエよ。」

せめて俺たちに渡してからにしろ。

そついつて高杉は半ば強引に酒を奪い取り栓を開けた。

「高杉だけ独り占めはするいぜよー」

「そーだそーだ！晋助、俺にも分けろっ！」

銀時はこれからどうするつもりなのか。

その瞳からは何も読み取ることができない。

きつとどんな道を選んでも困難が待ち受けているだろう

だが今は

今だけはこうして穏やかな時間を過ごさせてほしい。

「おい貴様ら！俺も居るといつことを忘れるな！」

つかの間の…… 夢想（後書き）

すみません、途中から自分でも何書いてんだかわかんなくなってきましたww

途中からナチュラルに桂視点です。

わかりづらっ!!

もっと精進するので、もし宜しければ感想、アドバイスなどお願いします!!

特に言葉使い!!

ちなみにうちの高杉さん時々今回みたいになる可能性大です(^^)

ここまでお読みいただき、ありがとうございました!!

苦悩、そして……〈宣言〉(前書き)

第三話！

またまたgodgod120%でお送りいたします！

感想、お気に入り登録とても嬉しいし、励みになります！

ありがとうございます

苦惱、そして……〈宣言〉

『屍かばねを食らう鬼が出てくると聞いて来てみれば……君がそうっ。』

またずい分と可愛い鬼がいたものですね

『くれてやりますよ、その剣』

剣せいっの使い方が知りたきゃ付いてくるといい

『銀時。太古の昔から、炭水化物と甘いものは合つとされているんですよ』

特別に私の好きな井の作り方を教えてあげましょう

『皆さん、己の心と己の大切なものを護れる人になってくださいね』

できることなら、最後まで見守っていたかったです。

松陽先生の言葉と慈愛に満ちた笑顔が水泡のようにぽつん、ぽつんと俺の心の内に浮かんでは消えていく。

松陽先生を一言で表すなら、光だ。

銀時という名前。

言葉

読み書き

剣術

応急処置などの医療

そして何より、大切な仲間。

それらは全て松陽先生が教えて、与えてくれたもの。

でも、消えてしまった。

松陽先生を護りきれなかった。

せめて、松陽先生の最期の言葉を守れるように。

そう、俺は強く思った。

だから、戦に出た。

大切な仲間を　　晋助、ツラ、アイツ　　を護るため、

護り通すため。

まあ途中から辰馬も加わったけどな。

万事屋だって、松陽先生が色んなことを教えてくれたからこそ出来た職業。

そこでも出来た、小さな仲間達。

でも離れちゃった、

離して、しまった。

俺は、どうすればいいんだ……？

高杉達は、「俺の好きなことをしていい」って言うてくれた。

でも、俺自身好きなことが分かっていない。

しかし昨日、結論は出した。

これでいいのかはわからないが、これでいいんだと自分に言い聞かせた。

良し悪しは神のみぞ知る、ってな。

スッ

音も断りもなく襖を開け、入ってきたのは高杉。どつやら今まで出かけていたらしい。

「何だよ。」

「てめエ、答えは決まったのか。」

入るなりいきなりかよーと、抗議の声を上げてみたものの、完全無視<sup>カト</sup>され、どっかりと窓の縁に腰掛けられた。

「あの〜高杉さん？」

「あア？」

「こっ、一応俺の部屋なんだけど。」

「だからなんだ。」

「どうしてそんなに寛いでるのかなーって」

「別に関係ねエだろ。悪いことでもあんのかよ？」

「・・・別に。」

「エ 力様か。」

「わお、高杉が突っ込んだ。」

おどけて言つと、返ってきたのは「ごまかすんじゃないねエ」の一言。  
お見通しってかコノヤロー

「えー、晋ちゃん冷たい。」

「死にてエのか？今なら介錯してやるぜい。」

「それは勘弁。」

「じゃあさつさと俺の質問に答えろ。」

そう言われ、昨日の夜考えに考え抜いた結果を口にする。

「攘夷に戻る。」

そう答えると高杉は眉間に皺を寄せた。

しばしの沈黙の後、

「それでいいのか。」

意外にもこんな返答。

「でも、俺の好きなようにしていいって言うてくれたのは3人じゃん?」

「餓鬼共はいいのか。」

うっ、痛い所を。

気にしてない、と高杉には言ったが本音は心の中でもややもやしすぎ  
て竜巻起きそうなぐらいだ。

何度も、餓鬼共あいつらのことは考えた。

嬉しかった。ああ言ってくれて。

でも、不安が拭いきれないのも確か。

あんなこと言ってるけど本心はそう思っていないんじゃないか。

俺に怯えてるんじゃないか。

だからこそ、離れたい。

攘夷に戻るという結論も己の弱さからきたもの。

怖い。

またアイツらに会うことが。

悲しそうな瞳をさせてしまうかもしれないということが

拒絶、されてしまうかもしれないということが。

どうしようもなく、怖い。

俺が沈黙していると、高杉は「分かった」と短い言葉を残し、襖の向こうに消えた。

場所は変わり、桂の私室

そこでは桂が読書、坂本が寝つ転がって天井を見つめていた。

何故坂本がここにいるかというと、先程、銀時の考えを誰が聞きに行くかと揉めに揉め、ジャンケンで決めて高杉が勝利したからである。

「高杉、人の部屋に入るときはノックぐらいしろといつも言っておろつ。」

「うるせエよ、てめエは母親か。」

高杉が部屋に入ると、最初に声をあげたのは桂。

続いて坂本が「どうだったんじゃ？」と聞いてくる。

「攘夷側こじうちに戻るってよ。」

ありのままに伝えると、二人とも固まってしまった。

「新八君とリーダーはどうするのだ。」

数十秒してようやく我に返った二人。やはり気になるのは子供達のことらしい。

「何も言わなかったぜイ？」

でも、明らか触れて欲しくねエって顔だった。大方、怖がられたくないか思ってたんだろ。」

銀時の心中を的確に察していた高杉。

そう答えた高杉に対し、そうか……と再び黙り込んでしまった桂。

しばらくして今まで黙っていた坂本がようやく口を開いた。

「じゃあ、わしゃああの二人に会いに行くぜよ。」

「坂本、貴様何をするつもりだ。」

「なあに、ちつくとあの二人に話をしに行くだけじゃ。」

あっけからんと坂本が答える。それに対し全てを察した様子桂は本を棚に戻して、ニヤツと笑い、こう言い放った。

「待て坂本。……………俺も行く。」

「善は急げじゃ！行くぜよ！」

第三話 e n d

苦悩、そして……〈宣言〉(後書き)

はい、意味わかんないww

ごめんなさい。

ホントにすみません。

期間開けまくってるくせにこんなものしか出来なくて……

感想、アドバイスよろしくお願いいたしますっ！

戸惑い……〈過去〉 上(前書き)

まさかの上中下ですww

戸惑い……〈過去〉 上

いつもは賑やかで騒がしく笑顔が溢れているこの空間。

しかしこの店の店主がいなくなってからは言葉も少なくなり、今も水を打ったように静かだ。

店主がいなくなって一週間。今日もこの空間に心の底からの笑顔は……ない。

「神楽ちゃん、もう夜遅いから寝ようっ?」

「嫌アル。銀ちゃん帰ってくるかもしれないネ。」

神楽は、うつらうつらと舟を漕ぎながらも、絶対寝ようとはしない。

それは、普段美容だ何だでさっさと寝てしまふ神楽としてはありえない行動で。

どれだけ神楽が銀時を大切に思っているのかというのがよく分かるものだった。

「新八こそさっさと寝るヨロシ。寝てないのがバレバレアル。」

「えっ……。」

事実、新八も気丈に振る舞ってはいるものの、目の下には濃くハッキリとした隈が存在していて、どれだけ寝れていないのかがよく分かる。

「神楽ちゃん……」

「銀ちゃんは絶対帰ってきてくれるネ。だから、待ってるアル。」

「でも、銀さんは……」

あの時の銀時が二人の脳裏を掠める。

『うん、かえる。松陽先生のところにかえるよ。』

「それにあの時の銀ちゃん、ちっちゃい子みたいだったアル。あん

なに動揺した銀ちゃん初めて見たネ。」

神楽は真剣な顔をして呟く。一方新八はどうしていいのかわからな  
いというような困り顔だった。

「確かに、僕だって銀さんのあんな顔見たことないけど……」

「銀ちゃんは、絶対アタシが護るネ！」

神楽の強い言葉に絆されるようにして、新八の顔も段々明るくなる。  
そして、新八も口を開いた。

「僕だって！銀さんのこと絶対護るんだ！」

「やはり頼もしいな、リーダー達は。」

そこへ突如響いた、聞き覚えのある声。声のした方へとつさに振り返ると、黒いモジャモジャと、ストレートの長髪というある意味対称的な二人が扉のところに立っていた。

「……何でいるんですか！／ネ！」

「アツハツハツ、お邪魔するぜよー」

「玄関が開いていたからな。」

「そんなこと聞いてるんじゃないんですけど！」

「そうアル！ツラ、もっさん、銀ちゃんはどうしたアルか！？」

詰め寄ってくる2人を宥め、ソファーに座る。新八が持って来たお茶を一口飲むと、神楽が再度「銀ちゃんはどうしたアルか？」と聞いてきた。

「今日は、その金時のことで話にきたんじゃ。」

「それに2人にも聞きたいことがあるのでな。」

「聞きたいこと……？」

新八が聞き返すと、桂はああと頷いてさらに言葉を繋げる。

「まあ、聞きたいことは後でもよからう。坂本、とりあえず話そう。」

「そうじゃな。まず今、銀時は」

坂本が銀時と呼ぶということはかなり真面目な話ということ。それに気づいた新八と神楽は姿勢を正した。

「ツラの屋敷におる。」

「ツラじゃない桂だ。」

「………そんで、銀時にこれからどうしたいかって聞いたら」

桂が言葉を引き継いだ。

「攘夷も戻る、と。そう言っていた。」

「「えっ……？」」

上  
e  
n  
d

戸惑い……〈過去〉 中（前書き）

中です！

私なりの過去なので、批判は受け付けません。

感想、アドバイス等よろしくお願いいたします（＾Ｏ＾）

戸惑い……〈過去〉 中

「本当、なんですか……？」

「ああ。むしろも今日聞いたばかりじゃがのう。」

そう言って、坂本は新八の出したお茶を一口啜る。

「銀ちゃんは何で攘夷戦争に参加してたアルか？その辺絶対教えてくれないネ。」

何時になく真剣な神楽の問い掛けに、桂と坂本は一瞬視線を合わせて頷き合った。



まず、坂田銀時を語るにはある人間の存在が必要不可欠だ。

その名を吉田松陽。俺や高杉の師であり、銀時の父親のような存在でもある。

銀時は物心つかぬ内に両親に捨てられてな。…何故か？容姿のせいだ。今はアルビノと言えば分かってくれる人が大半だが、俺達の幼き頃はそんな言葉なかったんだ。

その容姿のせいで行く村々から鬼と蔑まれ、畏れられ拒絶されたらしい。これは松陽先生が話してくださったことで俺が実際に見たわけではないのだが。

銀時は戦場跡で屍を漁って金や食料を手に入れて食いつないでいたんだ。そして鬼と呼び、襲ってくる人々を殺していく……あやつは松陽先生に出会うまでそんな生活を送っていた。

このような環境で銀時が普通の子に育つはずがなかった。俺達や先生と出会った時は感情と呼べるものは何も持つてはいなくてな、無表情でただ刀を抱えていただけだった。

でもそのうち段々と感情を持ちはじめてきた。喜び、怒り、悲しみ……初めて銀時が俺達の前で笑った時なんかは思わず小躍りしたものだ。思えば松陽先生が親バカになったのはあの頃だったかもしれん。

しかし、そんな時間も長く続かなかった。リーダーは知らないかもしれないが、昔、安政の大獄という攘夷思想を持った人々が大量に処刑されたことがあった。

先生は危険な攘夷思想を持ち、それを俺達のような子供に教えているとして処刑されることになってしまったんだ。

……悔しかった。ただ悔しかった。先生は危険な攘夷思想など持ち合わせてはおらなかった。むしろその逆で、話し合いで天人との争いを止めようとしていたんだ。

俺達は必死に抵抗した。だが、所詮俺達も子供。全く聞き入れてもらえずに、とうとう処刑の日が来た。

俺は…俺達は、その日を忘れるなんて出来ないのであらう。群がる大人を掻き分け、必死に手を伸ばして、松陽先生と名前を呼んだ。そんな中でも松陽先生は微笑<sup>わら</sup>ってこうおっしゃったのだ。

” 皆さん、己の心と己の大切なものを護れる人になってくださいね。できることなら、皆さんを最後まで見守っていたかったです。”

その後は……すまない、よく覚えていないんだ。気づいたら、布団の中だったのだな。

俺達は憎んだ。幕府も、天人も。

しかし、幕府や天人を一番憎んでいたのは銀時だ。銀時は誰よりも松陽先生を大切に思っておったからな。だからこそ、俺は久方ぶりに再会したときにかなり驚いたのだ。天人であるリーダーと共にいたことに。

そして、高杉は戦に出て松陽先生の仇討ちをしろと言った。

俺も、仇討ちと同時にこの国を変えなければならぬと言った。

そして銀時はそんな俺達を護る、と言って攘夷に参加したんだ。

銀時あざじは銀時あざじなりに先生の最期の言葉を守ろうとしておったのだろう。

そして高杉は…高杉もまだ松陽先生が世界の中心なのだ。

だから、先生を奪ったこの世界を壊そうとしている。

\*\*\*\*\*

「これが、俺や銀時が攘夷に参加した理由だ。」

桂はそう話を締め括った。新八や神楽は銀時の過去に何も言えないようだ。

「銀時は、今まで必死に生きてきたんじゃない。死んだ魚の目と言われちよるあの目も、色んな感情がごっちゃになってそれを押さえ込む為にあんな目になつとるんじゃないかとわしは思つとる。」

坂本の言葉に、新八と神楽は銀時の綺麗な深紅の目を思い出す。確かに死んだ魚のような目をしているが、その目は本人も言っている通り、輝く時は輝き、怒りや喜びを目に映す。しっかり感情を宿すのだ。

そんな2人を見て、桂と坂本は再度頷き合つと、茶を啜り、こつ切り出した。

「それで、質問なんじゃが……」

中 e n d

戸惑い……〈過去〉 下(前書き)

やっと上中下完結しました！

お待たせいたしました。

「おまんらは、あん時の銀時ば見てどう思ったがや？」

直球すぎる坂本の質問に黙り込む新八と神楽。そんな様子を見て、  
「正直に言ってくれて構わない」と桂が助け舟を出す。

「……………正直、驚きました。いつも僕達の前では飄々（ひょうひょう）としてて、怠（た）そう（な）喋（しゃ）り方（を）しているのに、あの時はすごく幼（こ）く見（み）えました。」

「あんな銀（ぎん）ちゃん初（はじめて）めたネ。銀（ぎん）ちゃん（が）アタシ（より）小（こ）さく見（み）えたアル。」

「そうか。」

二人の言葉に小さく頷くと、更に質問を重ねる。

「じゃあ、二人はこれからどうしたいんじゃ？」

「銀ちゃんに会いたいアル！会わせるネ、もっさん！」

「新八くんはどうなんじゃ？」

「僕だって！…僕だって銀さんに会いたいです！」

「……………そうか。」

新八と神楽の強い意志と瞳を見て、万事屋に来てから一度も笑うこと  
とのなかった桂がようやく微笑ほほえんだ。

「やはり、来てみて正解のようだったな、坂本。」

「そうじゃな。」

坂本も、朗らかに笑った。

「2人とも行くぜよ！」

そして、唐突にこう言った。

「……え？」

「おんしら、金時に会いたいんじゃない？なら、行くぜよ！」

坂本の明るい笑顔と言葉に2人の顔も見見るうちに明るくなった。

「はい！／＼おつヨ！」

桂、坂本が新八と神楽に会いに行っているころ、高杉もまた外に出  
ていた。

いつもの派手な着物に、一応の変装のためか編笠を被りゆったりと  
歩を進める。しばらくしてたどり着いたのはこぢんまりとした建物。

少し古びた看板には、「久坂診療所」の五文字。どうやらここは病  
院らしい。

「……………」

一度足を止め、無言で佇むと少し口角を吊り上げて笑い、再び歩き  
出す。

正面から入るのかと思いきや、高杉は裏口に回って扉の横の呼び鈴  
を鳴らした。程なくして一人の男が姿を現し、高杉を見ると「お待  
ちしております」と深々と頭を下げる。そして、

「高杉さん、どうぞこちらへ。」

と言って高杉を奥へ通した。

「ただいま呼んでまいりますので、少々お待ちください。」

高杉をある一室に通し、一礼して部屋を出ていく。高杉が慣れた手つきで煙管に火を入れ、吸っていると音もなく襖が開いた。

「やあ、久しぶり、晋助。」

開いた襖の向こうに立っていたのは、穏やかな笑みをたたえた男。

「よオ……久しぶりだな。」

最後に会った時と全く変わらないその笑みに、高杉も笑みを返す。

「君がここに来ると言うことは、誰かに何かが起こったと受け取っていいのかな？」

「あア、構わねエゼ。」

「そうか。で、何だい？」

「とりあえず、ンなどこ突っ立ってねエで座れや」

玄内

そう呼ばれた男は、さらに笑みを深めた。

下  
e  
n  
d

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9553y/>

---

もう二度と...

2011年12月23日17時48分発行